



央州寺通信 十一月号



「浄土真宗において身につけるべきこと」

「至りてかたきは石なり、至りてやはらかなるは水なり、水よく石を穿つ、*心源もし徹しなば*菩提の覚道なにごとか定ぜざらん」といへる古き詞あり。いかに不信なりとも、聴聞を心に入れまうさば、御慈悲にて候ふあひだ、信をうべきなり。ただ仏法は聴聞にきはまることなりと云々。

(『蓮如上人御一代記聞書』, 『註釈版聖典』, p.1292)

*心源：心の奥底 *菩提の覚道：仏のさとり

(現代語訳)「きわめて堅いのは石である。至ってやわらかなるものは水である。そのやわらかな水が、堅い石に穴をあけてしまう。そのように、菩提を求める心が真剣であり、それに徹しきることができるなら、覚りの道も成就できないことはないという古い詞がある。いかに信心のないものであっても、心をこめて聴聞することにとめれば、仏のお慈悲のはたらきによって、まちがいなく信を得ることができる。ただ仏法は聴聞することに限ると仰せられたことである。(『聖典セミナー 蓮如上人御一代記聞書』, 本願寺出版社, p.280)

今年も早いもので残すところわずかとなりました。この時期になると世間もホリデーモードに入り、私自身も何か浮ついてしまい仕事に身が入らなくなってしまう。年の始まりには「今年一年頑張ろう」と決まってしまうのですが、最後の最後まで徹底できないのは私の心の弱さであるなと思います。ただ、今年は仏教学の修士号取得、本願寺派学階の取得、武道大会での好成績など様々な事を成し遂げる事の出来た年でもあったので、これらの結果を来年に繋げられるように精進して行こう、と今の所は考えています。

さて、今月号は「浄土真宗において身につけるべきこと」と大それたタイトルにしてしまいました。といいますのも、改めて故・久堀弘義先生のご法話のテープを聞かせていただいていたのですが、その中で「浄土真宗は

覚えるものではなく、身につけるもの」というお言葉があり、とても感銘を受けたからです。覚えるということには忘れるということが必ずついてまわります。しかし、身に付いたものはなかなか忘れることはありません。様々な病気がありますから一概には言えませんが、例えば手の動かし方をいきなり忘れるということは稀です。それは手の動かし方が身についているからです。

ですから、浄土真宗において覚えておくべきことは何ですか？と問われても答えに困りますが、「浄土真宗において身につけるべきこと」とは一体何ですか？と聞かれますと、それは「仏願の生起本末を聞く」ということでありますと私は答えます。

「仏願の生起本末」とは阿弥陀如来のご本願の起こされたいわれ、その理由と、そのご本願がどのようなにはたしているのかということではありますが、それは『歎異抄』に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちけるみにてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」(『註釈版聖典』, p.853) とあるように自己中心的な考えを離れることの出来ないこの「私」、そのような「私」であるからこそ絶対に捨てず「必ず救う」(攝取不捨) というご本願が起こされ、今、南無阿弥陀仏の六字となって私の上で働いてくださっておる、そのことを聞かせていただくのであります。他人事と思って聞いておると浄土真宗はわかりませんが、自分のことと受け止めて聞かせていただくこの上なく有難いみ教えだと気づかせていただきます。

しかし、このみ教えが有難いと思うようになる、み教えが身についていくにも個人差があるでしょう。どのような石も水によって穴は開けられるでしょうが、石によって個体差があります。それと同じです。阿弥陀如来のお働きは常に誰にでも平等に降り注いでいますが、それを「(ご本願が起こされたのは) 私のためであったか」と受け止めて行くようになる、身についていくには時間差があるはずですが、しかし、お聴聞を重ねていくと必ず「私のためであったか」と気づかせていただくタイミングがあるのではないかと思います。

儒教の孔子の言葉を集めた『論語』に「学びて時に之を習う、亦説ばしからずや」という言葉があります。こ

れは「学んだことを機会があるごとに復習して身につけていくことがなんて楽しいことだろうか」という意味だ
そうですが、ご本願に出会うことによって自己中心的なモノの見方をしている自分だということを折りに触れて
気づかせていただき、そのような私であったからこそのご本願であったと反省しつつも慶んでいく。この姿勢・
この態度が浄土真宗を聴聞することによって身につけていくことではなかろうかと私は味あわせていただい
ております。

それでは、また来月。

合掌

文責・菅原祐軌

央州寺駐在開教使

